

ITOYU: The Scent of Oil and Dust

にじみでるもの

第一章

灯りの前に、米があつた

近江の国、日野。

山に抱かれたこの町は、
かつて「出ていく」ことで
生き抜く道を拓いた。

城が去り、

にぎわいが消えたとき、

人々は土地に

とどまらなかつた。

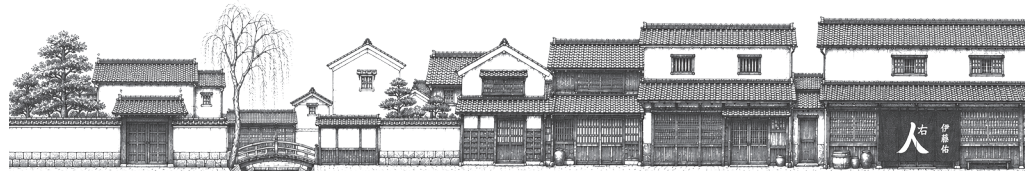
荷を背負い、道を行き、

見知らぬ土地で商いをした。

信用だけを頼りに。

のちに近江商人と呼ばれる

その人々の流れの中に、



私たちの原点がある。

明治四十三年。

初代・祐吉は、

この地に商いを興した。

扱ったのは、玄米。

贅沢品ではない。

人が生きるために

欠かせないものだった。

都市へ運び、

地方へ届ける。

行きも、帰りも、無駄にしない。

商いとは、

流れをつくることだった。

やがて、肥料を扱い、

さらに油を扱いはじめる。



灯りをともすもの。

機械を動かすもの。

時代が求めるものは変わる。

しかし、

選ぶ基準は変わらなかった。

人の暮らしを

支えるものかどうか。

初代は、

豊かさを知る人でもあった。

白いネクタイにスーツ。

牛肉のすき焼き。

当時としては珍しいその姿は、

先を見ていた証でもあり、

同時に、危うさでもあった。

商いは拡がり、

そして、借財も残った。



すべてを引き受けたのが、

二代・祐次郎である。

二十歳。

父を失い、母を失い、

姉を失った。

わずか二年のあいだに、

三度の別れ。

そして残されたのは、

商いと、借金だった。

若さは、信用にならない。

仕入れは高く、

支払いは現金。

足元を見られることが、

日常だった。

それでも、逃げなかった。

借りたものは、返す。

約束は、守る。

それだけを、繰り返し続けた。

やがて彼は言うようになる。

「信用は、返した金からしか生まれない。」

戦争が、すべてを止めた。

商いは閉ざされ、

人は戦地へ送られる。

祐次郎もまた、

衛生兵として出征した。

終戦。

何もないところから、



再び商いを始める。

そのとき彼は、

静かに、

しかし決定的な選択をする。

米から、油へ。

食を支える商いから、

暮らしと産業を動かす商いへ。

時代は、

エネルギーを求めていた。

しかし、

始めるための資金すらなかった。

最初の給油機は、

妻の実家から借りた金で

手に入れた。

そしてその借金に、

自ら利息をつけて返した。

信用とは、

条件ではなく、姿勢である。

その後も、試練は続く。

盗難に遭い、片目を失う。

戦争の後遺症に苦しむ。

それでも、商いは止めなかった。

強いから続いたのではない。

やめなかったから、続いた。

周りは畑、舗装もされていない

国道沿いに立ち、

彼はまだ幼い三代目に言った。

「裕治よ、ここに、新しい給油
所を建てるんや！」

何もない場所に、

拠点を思い描く。

未来は、説明ではなく、
決断から生まれる。

その言葉を聞いていた

三代・裕治は、

やがて商いの現場に

立つことになる。

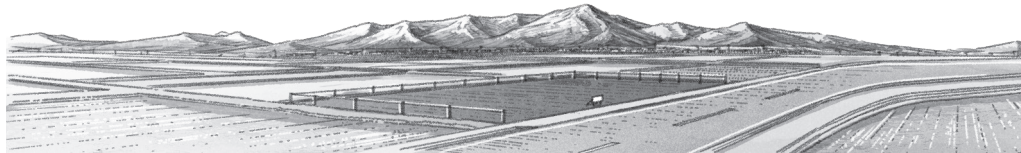
病弱で、

決して恵まれた体では
なかった。

それでも、店に立ち、

量り売りをし、油を詰めた。

一升瓶に混合油をつくり、



米を量り、炭を運ぶ。

商いは、理屈ではなく、

手で覚えた。

そしてもう一つ覚えたこと、

それは商人を支える

女性たちの姿。

毎朝まだ暗いうちから起き、

釜戸に火を入れ、

あふれんばかりの

弁当を持たせる。

そして自らは野菜を背負い、

町へ売りに出る。

夜になれば翌日の支度を整え、

手を休めることはない。

テレビを見ても、

編み物や干し柿作りの

手は動いている。

暮らしの灯りがうれしくて、

何もしていない時間が

もったいなかったのかもしれない。

商いは、

店先に立つ者だけで

成り立つものではない。

誰かを支える営みもまた、

商いの一部だった。

時代は高度成長へと進む。

だが、その裏で、

商いの世界には

分かれ道があった。

一つは、守られる道。

赤字は補填され、

競争からは距離を置く。

もう一つは、自立の道。

成果で測られ、

結果でしか評価されない。

多くが前者を選ぶ中で、

当社が選んだのは後者だった。

米国メジャーとの提携。

それは、

後ろ盾を持たない代わりに、

すべてを自分たちで

引き受けるという選択だった。

甘えは許されない。

だからこそ、徹底した。

現場を見る。

無駄をなくす。

当たり前のことを、

誰よりもやる。

そして、こう考えた。

どうすれば、確実に勝てるか。

出した答えは、

派手なものではなかった。

現金で払ってもらえば、
安くする。



それだけだった。

手形が当たり前の時代に、

あえて現金にこだわる。

お客様には、怒鳴られながら
理由を説明して回る。

回収の手間を減らし、

未回収のリスクをなくす。

小さな合理を、積み重ねる。

それが、やがて差になる。

その考え方は、

日々の仕事にも徹底していた。

ある来客に

お茶を出したときのこと。

裕治は言った。

「今日は特別ですわ。」

不思議に思った相手が

理由を尋ねると、

こう続けた。

「うちは普段、

お茶は出してまへん。」

驚く相手に、

三代目は笑いながら言った。

「お茶をケチってるんやない。

お茶を出す人件費が

もったいないんですわ。」

そして最後にこう付け加えた。

「何十年もかけて鉛筆一本、

トイレットペーパー一つまで

儉約し、その積み重ねで今が

ある。」

「無駄なお金は1円も使わない。

その代わり、

未来を見据えて、使うべきときには大胆に使う。」

未来のために無駄を削る。

これは特別な戦略ではない。

凡事徹底である。

そしてその根底にあったのは、

二代から受け継いだものだった。

信用である。

やがて、世界が揺れる。

オイルショック。

仕入れは乱れ、

価格は崩れ、

業績は打撃を受けた。

その中で、問われたのは

目先の利益を取るか、

それとも

商いの筋を守るかだった。

当社は、決断する。

業転買いを、やめる。

一時の利益よりも、

長く続く商いを選ぶ。

その過程で、
会社の中に溜まっていたものを、
すべて出し切った。

傷は残った。

だが、歪みは消えた。

情勢は選べない。

だが、姿勢は選べる。

そのとき、

もう一度確認された。

信用が、すべての土台である。

苦しい時ほど、

人は試される。

そのときに選んだものが、
その会社の本質になる。

私たちは、

何度もそれを選び直してきた。

米から始まり、

油へと広がり、

そして時代の波を越えてきた。

だが、本質は変わらない。

暮らしを止めない。

近江の商人は、

道を整え、灯りをともした。

彼らは、

大名でも英雄でもない。

夜のうちに支度をし、

朝早く荷を背負い、

誰かの暮らしへ

向かった人たちだった。

私たちの歴史は、

そんな無名の営みの

積み重ねでできている。

灯りの前に、米があった。

そして今も、

変わらず、

人の営みに必要なものを
届けている。

第二章 私たちは何者か
— 商いの美学 —

私たちは、

商品で定義される

会社ではない。

米から始まり、

油へと広がった。

だが、本質は変わっていない。

暮らしを止めないものを扱う。

それが、私たちの仕事である。

それは、かつては

生きるためのものだった。

しかし今は、

豊かに生きるための
ものへと広がっている。

信用は、語るものではない。

設計し、

積み上げるものである。

特別なことはしない。

凡事。鉛筆一本を大切にする。

流れを止めず、

歪みを残さない。

それを、

選り続けてきた会社である。

第三章 時間との付き合い方
― 続ける意思 ―

すぐに結果が出ることは、
長くは続かない。

私たちは、時間で勝つ。

続ける。

積み重ねる。

繰り返す。

変わるものは、手段。

変わらないものは、
意味である。

継ぐということは、

守ることではない。

選
び
直
し
続
け
る
こ
と
で
あ
る
。

第四章 迷ったときの基準
— やらないこと —

私たちは、すべてを取らない。

歪みが出るなら、やらない。

続かないなら、やらない。

信用を削るなら、やらない。

短期の利益より、長期の整合。

やる理由より、

やらない理由を持つ。

それが、判断の軸である。

第五章 地域との距離
― 属すること ―

私たちは、地元のために
存在しているのではない。

地元の中に存在している。

外で稼ぎ、持ち帰る。

流れをつくり、還す。

それは、モノだけではない。

人の流れ。

時間の流れ。

体験の流れ。

地域に、訪れる理由をつくる。

滞在する意味をつくる。

本店は動かさない。

離れないという選択が、

私たちの立ち位置を

決めている。

第六章 にじみでるもの
― 暮らしをつくる ―

私たちは、変わってきた。

米から始まり、油へ。

そして今、暮らしそのものへ。

扱うものは変わる。

だが、意味は変わらない。

暮らしをとめない。

それは、支えることから、

豊かにすることへと

広がっている。

必要なものを届ける。

そして、

訪れたくなる理由をつくる。

この土地に、流れを生み、
この土地に、時間を残す。

それが、

これからの

私たちの仕事である。

誇れる商いを続けていく。

暮らしをとめない。

ITOYU:
The Scent of Oil and Dust
にじみでるもの

初版第一刷発行 2026 年 8 月 15 日
First printing published on August 15, 2026

脚本・構成 田中薫
イラストレーター Miltata
タイトル翻訳 荘加愛
原案 伊藤裕治 / 伊藤侑祐
ディレクター 田中薫
企画・プロデュース itoyu クリエイティブ&メゾン

総合監修・デザイン 中野築月

Written by Tanaka Kaoru
Illustration Miltata
Title Translation Soka Ai
Original Story Ito Hiroji / Ito Yuusuke
Directed by Tanaka Kaoru
Planning / Produced by itoyu creative&maison

Executive Producer & Design Nakano Kizuki

©2026 ITOYU Co., Ltd.



Chapter 3
Our Relationship with Time
— The Will to Continue —

What produces results quickly
does not last long.
We win through time.

Continue.
Accumulate.
Repeat.

What changes are the means.
What does not change is the meaning.

To inherit
is not simply to preserve.

It is to keep choosing again.

Chapter 4
Our Standard When We Are Lost
— What We Do Not Do —

We do not take everything.
If it creates distortion,
we do not do it.

If it cannot continue,
we do not do it.

If it erodes trust,
we do not do it.

Long-term coherence
over short-term profit.

More than reasons to do something,
we hold reasons not to.

That is our standard of judgment.

Chapter 5
Our Distance from the Region
— To Belong —

We do not exist
for the sake of the local community.
We exist
within the local community.

Earn outside,
bring it back.

Create flow,
and return it.

And that flow is not only of things.

The flow of people.
The flow of time.
The flow of experience.

Create reasons
for people to visit the region.

Create meaning
in staying here.

We do not move our head office.

The choice not to leave
defines our position.

Chapter 6
What Seeps Through
— Creating Daily Life —

We have changed.
From rice,
to oil.

And now,
to daily life itself.

What we handle changes.
But its meaning does not.

To keep daily life moving.

That has expanded
from supporting life
to enriching it.

Deliver what is necessary.

And create reasons
to visit.

Bring flow to this land.
Leave time in this land.

That is the work
we will carry forward.

To continue a business
we can be proud of.

To keep daily life moving.

To the surprised visitor,
he said with a laugh:

"It's not that we're trying to save on tea.
We're saving on the labor cost of serving
it."

"The employee who just served you tea
is in charge of accounting.
We didn't hire them to serve tea."

And then he added:

"We run this business by being frugal
down to a single pencil,
down to a single roll of toilet paper."

"But when it is time to spend,
we spend boldly."

We cut waste
for the sake of the future.

This is not a special strategy.
It is the thorough practice of ordinary
things.

And at the root of it all
was what had been inherited
from the second generation.

Trust.

Before long,
the world was shaken.

The oil crisis.

Procurement became unstable.
Prices collapsed.
Performance was severely damaged.

In that moment,
the question was whether to take
immediate profit,
or to preserve the integrity of business.

The company made a decision.

To stop buying from the spot market.

Rather than momentary profit,
we chose business that could continue
for the long term.

In that process,
everything that had accumulated inside
the company
was released.

Scars remained.
But the distortion disappeared.

We cannot choose the circumstances.
But we can choose our attitude.

At that moment,
we confirmed once again:

Trust is the foundation of everything.

People are tested most
when times are difficult.

What they choose then
becomes the essence of the company.

We have chosen it again and again.

Beginning with rice,
expanding into oil,
and crossing the waves of the times.

Yet the essence has not changed.

To keep daily life moving.

The Omi merchants
prepared the roads
and lit the lamps.

They were neither lords nor heroes.

They were people who prepared during
the night,
shouldered their loads early in the
morning,
and set out toward someone's daily life.

Our history is made from the
accumulation
of such unnamed acts.

Before there was light,
there was rice.

And even now,
unchanged,
we continue to deliver
what people need for their lives.

Chapter 2 Who We Are — The Aesthetics of Business —

We are not a company
defined by our products.
We began with rice,
and expanded into oil.

But our essence has not changed.

We handle what keeps daily life moving.

That is our work.

Once, it was something people needed
in order to live.

Now, it has expanded
into what allows people to live richly.

Trust is not something to be spoken of.

It is something to be designed,
and built up.

We do nothing extraordinary.

Ordinary things.
A single pencil, treated with care.

Do not stop the flow.
Do not leave distortion behind.

That is the company
we have continued to choose to be.

he did not stop the business.

It did not continue because he was strong.
It continued because he did not quit.

Standing along a national road
surrounded by fields,
not yet paved,

he said to the still-young third-
generation successor:

“Yuji, we’re going to build a new service
station here!”

In a place where there was nothing,
he imagined a foothold.

The future is born not from explanation,
but from decision.

The third-generation successor,
who had heard those words,
would eventually stand
at the front line of the business.

He was frail,
and by no means blessed with a strong
body.

Even so, he stood in the shop,
sold goods by measure,
and filled oil containers.

He mixed oil in one-sho bottles,
measured rice,
and carried charcoal.

Business was not learned through
theory.

It was learned by hand.

And there was something else he
learned:

the presence of the women
who supported the merchants.

Every morning, while it was still dark,
they rose,
lit the stove,
and prepared overflowing lunch boxes.

Then they themselves carried vegetables
on their backs
and went out to sell them in town.

At night, they prepared for the next day,
never resting their hands.

Even while watching television,
their hands kept moving —
knitting,
making dried persimmons.

Perhaps the light of daily life made them
happy.
Perhaps time spent doing nothing
felt too precious to waste.

Business is not sustained
only by those who stand at the
storefront.

The act of supporting someone
is also part of business.

The times moved into the era of rapid
economic growth.

But behind that growth,
the world of business faced a fork in the
road.

One path
was the path of protection.

Deficits were compensated,
and competition remained at a distance.

The other path
was the path of independence.

Measured by results,
and evaluated only by outcomes.

While many chose the former,
our company chose the latter.

A partnership with an American major
oil company.

It was a choice to take everything upon
ourselves,
instead of relying on backing.

There was no room for dependence.

That is why we were thorough.

Look at the site.
Eliminate waste.
Do the obvious things
better than anyone else.

And then we asked ourselves:

How can we win with certainty?

The answer we arrived at
was not a flashy one.

Pay in cash,
and the price will be lower.

That was all.

In an era when promissory notes were
the norm,
we insisted on cash.

We went around explaining the reason
to customers,
even as they shouted at us.

Reduce the work of collection.
Eliminate the risk of non-payment.

Accumulate small rationalities.

That, over time,
becomes a difference.

This way of thinking
was carried through even in daily work.

Once, when tea was served to a visitor,
the third-generation leader said:

“Today is special.”

When the puzzled visitor asked why,
he continued:

“We usually don’t serve tea here.”

Chapter 1

Before There Was Light, There Was Rice

Hino, in the province of Omi.
Embraced by mountains, this town once
found its way to survive by “going out”
into the world.
When the castle was gone,
and the bustle disappeared,
people did not remain rooted to the
land.

They carried their loads, took to the
road,
and traded in unfamiliar places.
Relying on nothing but trust.

Within the current of those people,
who would later come to be known as
the Omi merchants,
lies our origin.

In 1910,
the first-generation founder, Yukichi,
began his business here.

What he dealt in was brown rice.

It was not a luxury.
It was something essential for people to
live.

He carried it to the cities,
and delivered it to the regions.
Neither the outward journey nor the
return was wasted.

Business was the act of creating flow.

Before long, he began handling fertilizer,
and eventually oil.

Something that lit lamps.
Something that moved machines.

What the times demanded would
change.
But the standard by which we chose did
not.

Whether it supported people’s lives.

The founder was also a man who knew
abundance.

A white necktie and a suit.
Beef sukiyaki.

For the time, such things were unusual.

They were proof that he was looking
ahead.
And at the same time, they carried a
certain danger.

The business expanded.
And debts remained.

The one who took everything upon
himself
was the second-generation leader, Yujiro.

He was twenty years old.

He lost his father,
his mother,
and his elder sister.

Three farewells
in the span of just two years.

What was left to him
was the business,
and debt.

Youth does not become trust.

Purchases were expensive.
Payments had to be made in cash.

Being taken advantage of
was part of everyday life.

Even so, he did not run away.

What was borrowed would be repaid.
Promises would be kept.

He repeated only that.

Eventually, he came to say:

“Trust is born only from the money you
have repaid.”

War brought everything to a halt.

Business was closed off,
and people were sent to the battlefield.

Yujiro, too, went to war
as a medic.

The war ended.

From nothing,

he began business once again.

At that moment,
quietly,
yet decisively,
he made a choice.

From rice
to oil.

From a business that supported food,
to a business that moved daily life and
industry.

The times were asking for energy.

But he did not even have the funds to
begin.

The first fuel pump
was purchased with money borrowed
from his wife’s family.

And that debt,
he repaid with interest
of his own accord.

Trust is not a condition.
It is an attitude.

The trials continued.

He was robbed,
and lost sight in one eye.

He suffered from the aftereffects of the
war.

Even so,